

ひと

重厚長大産業・基幹労連に初の女性中央執行委員

西野ゆかりさん



肩ひじ張って男性と伍するのではなく、男性リーダーに引っぱってもらいながら女性の感性を生かせる活動ができれば――。九月の基幹労連大会で中央執行委員に選ばれた西野ゆかりさんは、こう意気込みを語る。

基幹労連は鉄鋼労連、造船重機労連、非鉄連合が統合して昨年九月に結成した産業別組合。二期目の役員を選出する今年の大会では、旧組織役員を横滑りさせた一期目の体制を大きく見直し、役員のスリム化や女性・プロパー役員の登用を行った。西野さんは、旧産別時代を含めて初めての女性中執。非鉄連合には、プロパー職員の役員への登用制度はなかったことから、今回は、旧非鉄のプロパーとしても、初の抜擢だ。

労働運動の空気が意外に肌に合った

元々、企業に一般職として入社したが、数年後、結婚を機に退職。同じ社宅に住

む労組役員の勧めで、非鉄連合の前身である資源労連のプロパー職員になった。結婚前は考えてもみなかった組合への転職。むしろ、自分には縁遠い世界との思いだった。ところが、仕事を始めてみると、「皆が一つの方向に進んでいく力に感動して、印象が変わっていった」。加えて、「正義感が強く、熱くなりやすい」持ち前の性格も、労働運動の空気にピッタリ合った。

「上司の人たちには、たくさんハードルを課されて戸惑ったが、失敗してもめげずに何度でもぶつかっていった。当時は気が付かなかったが、今は愛情だったと分かる。育ててもらって感謝しています」と述懐する。基幹産業の労働組合は、懐の深いリーダーたちが熱き心で組合を牽引し、発展させてきた歴史を誇る。西野さんもその血を引いている。

組合員に分かりやすく説明したい

これまでは、出身の非鉄連合時代も含めて約六年間、広報部門で機関紙づくりに従事。難しい組合の専門用語を「誰でも理解できるように、分かりやすく正しく説明する」ことに苦心してきた。今期からは産業政策の担当。内容が硬く耳慣れない言葉が多いのは、産業政策も共通している。今は、机に積まれた膨大な資料の山と格闘中だという。

新しい仕事にプレッシャーもある。「機関紙の編集では、身の周りのことを広く取り上げてきた。今度は一つひとつの問題を深く捉えていく仕事。漠然としがちな課題を、どうすれば組合員に身近に感じてもらえるか」。その半面、広報部門

で培った知識や経験を裏づけに「産業政策についても、分かりやすい言葉で説明したい」とやる気も十分。組合員が関心を持てる環境をつくり、最後には「二五万人全員が同じ問題意識で課題に向かっている」。そんな運動にすることが理想だ。

女性組合員の牽引役になれば

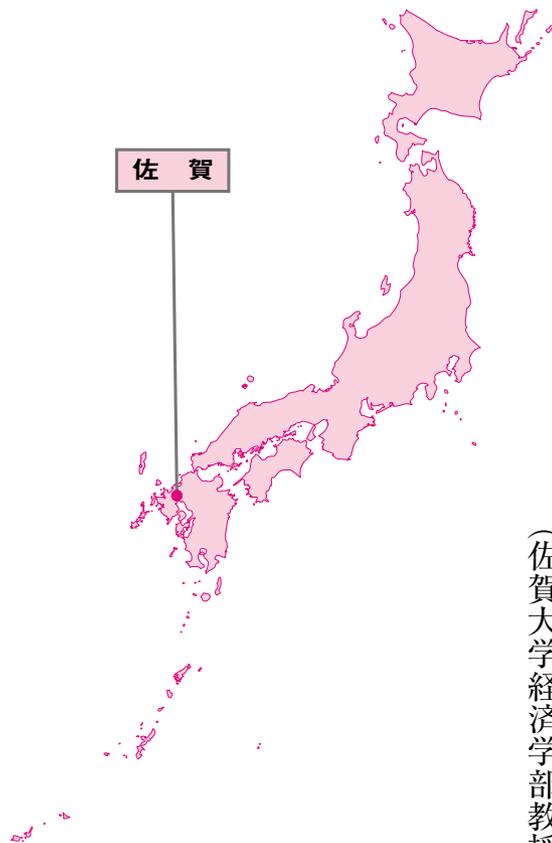
基幹労連の組合員は現場労働者が大半で、女性組合員は少ない。しかし、今は少子高齢化対策など、本来、女性の意見がもつと反映されて然るべき問題も少なくないはず。基幹労連では来夏、男女共同参画社会の集会を予定するなど、女性リーダーの育成を検討している。「まだ、勉強中の身でおこがましいが」と控えめながら、「これから頑張ろうという女性たちのためにも、まず自分が先陣をきるつもりで頑張りたい」と意欲を燃やす。結成大会では書記を務めたが、新役員が壇上で一人ひとり紹介される姿をみて、「それまでの皆の苦勞を思い出して涙が止まらなくなり、メモを取るどころではなくなってしまう」ほどの感激屋。喜怒哀楽がはつきりしていて、趣味のゴルフも職場の仲間と賑やかに回る。その一方で仕事を離れば、お茶をたてて心を静める一面も。「無の世界」に浸るのが楽しみ」と笑顔をみせた。

(調査部 新井栄三)

各地の学窓から

ある日の
講義から

富田義典
(佐賀大学経済学部教授)



佐賀

私の勤務する佐賀大学経済学部では
七年前から課程・コース制を採ってい
る。コースは四つあり、私が所属する

のは総合政策コースである。この名称
からは内容をイメージすることは難し
いだろうという配慮から、コース紹介

のため、入学時の学生に向けてコース
の教師全員が一回ずつ自らの研究教育
内容を紹介する講義を設けている。学
生がゼミに所属するのは二年生後期か
らで、そのさいの参考となるよう教師
が一度顔見せしておく目的もこめられ
ている。今年もその講義が近づいた頃、
ゼミ生に「君が入学したときに聞いた
はずの僕の講義を憶えているか」と問
うたところ、「憶えていません」とい
う答がかえってきた。それも働いてか、
その講義の準備にはいささか時間をか
けた。

一回の講義で、問題関心を刺激する
ような内容を物色しようとする意識が
あったといってもよい。その結果、二
つの事象を柱にすることに決めた。佐
賀県の労働時間と最低賃金である。労
働時間については、佐賀県は一人あた
り実労働時間が全国最長であり(平成
一四年、三〇人以上事業所で一九五六
時間/年。毎勤統計より)、しかもこ
こ数年連続チャンピオンであること、
地域最賃については、時間あたり六〇
五円(平成一五年)で、北東北、西・
南九州、沖縄の七県と並び全国最下位
であることを、データをしめしながら
話した。

学生がこうしたことを素材にして、
なぜ佐賀県の労働時間は日本一長い
のか、統計的トリックにすぎないのか、
残業が長いのかあるいはそもその標
準労働時間からして長いのか、最低賃
金が最低になるほど佐賀県は県民所得
が低いのか、等々を思い浮かべながら、
少しでも自分でデータに当たってくれ
ることを期待しながら私は話した。
しかし講義の最後に、「労働時間は

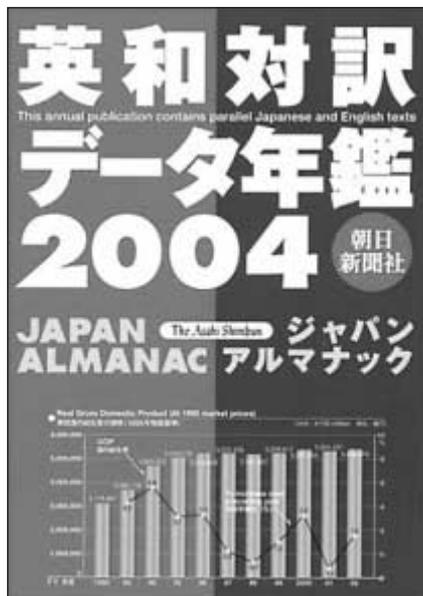
長いし、賃金も最低だしな」と言っ
た。

おそらくこれが効いたのだろう。講
義後に提出させた学生の感想では、佐
賀県には就職しないようにしたいとい
うものが多発した。これには驚いた。
都市部への流出を助長するようなこと
をいつてしまったという思いとともに、
事実に向かい合う姿勢をあらためて考
えさせられた。

というのは学者の常として、事実を
突き放してみなさいということをも私
もゼミなどではしばしば口にする。とりあ
えずはそれでよいのだろうが、よくよ
く考えてみると学者としても教師とし
ても、そうした割り切りで十分だろう
かと考える。かりに事実への共感があ
ったとして、それがあつたから十分な
認識にたどり着けないといえるのだら
うか。あるいは他者への理解において
も、いったんは他者の考えにそつ
て考えてみることににより、より深い観
察が可能になることもあるだろうし、
また他者であるということは自己との
異同や関係を問題にしているわけだか
ら他者を文字どおり外在物であるとし
てしまえば、その他者は他者ですらな
い、つまり関心の存在となる。そう
考えると、上述の学生たちの即事的反
応は、いまの学生は問題意識が足りな
いといって嘆いていけば済むというよ
うな気分を吹き飛ばしてくるに十分
なものであった。

富田義典(とみた・よしのり)

労働経済論、労使関係論専攻。主な
著書として、『ME革新と日本の労働シ
ステム』(批評社、一九九八年)など。



朝日新聞『ジャパン・アルマナック』2004

朝日新聞社（2003年発行）

三〇年以上にわたって、私は、ジャーナリストとして、日本についての記事を書いてきました。その間、最も長かったのはジュート・ドイチェ・ツァイトウング（南ドイツ新聞）の極東特派員時代です。様々なテーマの記事を書きました。ニュース記事、解説記事、ルポルタージュエtc.です。

これらの報道には、沢山のインフォメーションが、しかも出来るだけ速く且つ新しいものが、必要です。新しい情報は、ラジオやテレビのニュース、新聞記事、記者会見、インタビュ、現地の視察などから得られます。

そして、新しく得た情報を正しく分析し、位置付けるためには、比較する資料が要ります。比較する資料は、過去にそのテーマで書いた自分の記事、新聞の切り抜き、白書、年鑑などです。

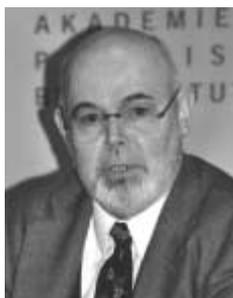
私が大変重宝して使ったのは朝日新聞社の発刊している『ジャパン・アルマナック』でした。新書判の大きさと扱いやすく、内容も広範です。

この『アルマナック』は、日・英二カ国語で作られているため、本当の意味で、外国との懸け橋の役割を果たしています。英語と日本語の説明が隣り合っていて、日本語が十分に分からない外国人でも、英語から直に情報を得ながら、徐々に日本語の表現に慣れることが出来るでしょう。逆に日本人で、この本を利用する人たちは、英語では、それらの言葉がどう表現されているかが、自然に身につくのではないかと思われます。

私に興味深い例をあげると、戦後の歴代の日本の首相在职期間のリストです（二九頁）。二十八人という数字は、先進工業国の中では、イタリアが、それを凌ぐだけです。ドイツの戦後は一九四九年に始まりますが、旧西ドイツから数えて、現在のシュレーダー首相は七人目の首相です。現小泉首相は、六七年に私が日本に来てから一人目、当時は佐藤首相でした。

二二二頁の高校進学率、義務教育を終えた子供の九六%が高校へ入るといふ数字は、日本の教育水準の高さを現しています。ドイツは、システムが違いますが、高校進学（ギムナジウム）は三〇%というのが現状です。

七六頁の失業率も、ドイツは日本（五%）の倍、特に旧東ドイツは一八%と高い失業率です。日本人の持ち家の率も六〇%で、ドイツよりも高いのです（二八九頁）。



Gebhard Hielscher

（ゲブハルト・ヒールシャー）

フリードリヒ・エーベルト財団（FES）東京事務所長

Profile

1934年生まれ。66年、ドイツの弁護士資格取得。67年以降、在日。67～68年、2001年以降、FESの東京事務所長。71～2000年「南ドイツ新聞」極東特派員。この間、在日外国報道協会会長（79～83年）、在日外国特派員協会会長（94～95年）。2000～03年度、神奈川大学経営学部教授。

図書館だより

9月の主な受け入れ図書

<p>大内伸哉 著『コンプライアンスと内部告発』日本労務研究会 企業の不祥事が頻発している。法令や社会規範さえ遵守しない企業に存在意義はないが、従業員が内部告発をした場合、その保護はいかにあるべきか、労働法学者の観点からこの問題を詳述している。</p>	<p>早房長治 著『恐竜の道を辿る労働組合』緑風出版 逆境にあってこそたよりになるのは労働者の連帯組織である組合である。しかし、失われた10年の間も労働組合組織率は下げ止りの傾向を見せない。連合評価委員でもあった著者の組合再生の提言である。</p>
<p>橋木俊昭 編著『封印される不平等』東洋経済新報社 日本社会は格差・不平等度が拡大しているのか。不平等化論者の著者たちによる座談会と、橋木による理論的・実証的分析からなる本書はまた、社会から不平等が目を見えられ、「封印」されていると主張する。</p>	<p>丸山俊著『フリーター亡国論』ダイヤモンド社 衝撃的なタイトルだが、真意はフリーターではなく「フリーターを生む社会が国を滅ぼす」であるという。社会は微妙なアクター間の布置連関によって動いている。グランドデザインの下での分析が急務である。</p>
<p>城繁幸著『内側から見た富士通「成果主義」の崩壊』光文社 富士通の成果主義の試みとはいったいなんであったのか。内部告発とは一味異なる、当事者の苦悩の告白である。たった一つ的事例であっても、成果主義を具体的に検証する生きた教材がここにある。</p>	<p>三田誠広 著『団塊老人』新潮社 団塊の世代という言葉は完全に世の中に定着してしまっただが、十把一からげに断定できるものなのか。自らも同世代に属する作家である著者の考察によっても「団塊老人って何」と相変わらず曖昧である。</p>
<p>梅森浩一 著『残業しない技術』扶桑社 川久保美智子 著『女子大生・OLの職業意識』かんぼう 笠原真澄 著『仕事をやめられない、あなたへ』サンクチュアリ・パブリッシング 小林篤子 著『高齢者虐待』中央公論新社 中西新太郎 著『若者たちに何が起きているのか』花伝社 (新着受け入れ図書の詳細は、当機構ホームページの「労働図書館」内「新着図書情報」をご覧ください)</p>	<p>坂中英徳 著『外国人に夢を与える社会を作る』日本僑報社 齊藤英介 著『天職：発展途上国と向き合って暮らす』不空社 斎藤禎 著『社会起業家』岩波書店 伊丹敬之 ほか 著『ビジネススクール流「知的武装講座」』(プレジデント社)</p>

今月の耳より情報

当館の誇るべき特徴の一つは、労働とその周辺の洋雑誌を多数収集し、提供していることです。現在、収集している洋雑誌の範囲は、法学、経済学、社会学、教育学、経営学、心理学等々に及び、タイトル数は二二〇種を数えます。

収集雑誌のタイトルは、当機構のホームページの労働図書館のコーナーで紹介しています



(URL=<http://www.jil.go.jp/lib/syozo/yo.html>)が、これだけの洋雑誌の収集・提供は、一朝一夕になされたものではありません。当機構の前々身の日本労働協会以来の先人の苦勞の賜物です。

当館はどなたでも閲覧が可能です。洋雑誌もコピーサービス(一枚二〇円)が受けられます(残念ながら、雑誌の貸出はいたし

ておりません)。また、遠方の方でも、お近くの図書館を介してコピーサービスが受けられます。貴重な公共財産です。ご利用をお待ちいたしております。

図書館長のつぶやき

図書館の経営資源の一つに、書庫スペースがあります。年々増えていく図書、製本雑誌の収容は頭の痛いところです。インターネットで全文がダウンロードできる雑誌は、購読を中止するという意見の人が増えてきました。しかし、紙には紙の良さがあります。雑誌に触れてこそ、執筆者や編集者の苦勞が伝わる気もします。目下の当図書館の悩みの一つです。

ご愛読いただきました「BOOK新刊ピックアップ」「労働図書館/資料センター受け入れ図書」は先月号をもって打ち切り、今月号より、装いを新たにいたしました。

ご意見・ご感想をお待ちいたしております。



ご案内 労働図書館(資料センター)

当図書館は、社会科学関係書を中心に和書96,000冊、洋書24,000冊、和洋の製本雑誌20,000冊を所蔵している労働関係の専門図書館です。

労働関係の分野には、労働法、労働経済、労働運動、雇用職業、女性労働、パート派遣、高齢者労働、障害者労働、外国人労働、社会福祉などがあり、これらで蔵書の半数以上を占めています。この他にも、経済書をはじめ経営学、心理学、教育学、社会学など関係分野に及んでいます。また、和雑誌(490種)、洋雑誌(220種)、紀要(450種)、組合機関紙についても、受け入れています。

特色としては、厚生労働省をはじめとする官公庁発行の統計類などの逐次刊行物、日本経団連など経営者団体の刊行物や民間研究団体刊行物、社史があり、労働組合に関しては、労働運動史、ナショナルセンターや産業別組合の大会資料などを継続的に収集しています。洋書については、特にILO(国際労働機関)総会の議事録やOECD(経済協力開発機構)の刊行物や各国政府の労働統計書などを収集して閲覧に供しています。特殊コレクションは、戦前・戦後を通して労働組合の歴史的に貴重な原資料を収集、保管しています。

開館時間:9:30~17:00

休館日:土曜日、日曜日、国民の祝日、年末年始(12月28日~1月4日)、その他

電話番号:03(5991)5032/FAX:03(5991)5659

利用資格:閲覧はどなたでも自由にできます

貸出:和書・洋書とも2週間、5冊までです

※身分証明書(運転免許証、健康保険証など)をお持ちください

レファレンスサービス:図書資料の所在調査などのサービスを行っています